

第4章 モデル事業

- 1 鷹栖町（上川管内）
- 2 芦別市（空知管内）
- 3 成果と課題

第4章 モデル事業

1 鷹栖町（上川管内）

鷹栖町は、北海道のほぼ中央、上川管内の中心部に位置し、北海道第二の都市旭川市に隣接している。周りを小高い山に囲まれ、全体的には盆地状をなし、中心部を石狩川に注ぐオサラッペ川が北から南へ貫流している。

品質・収穫量ともに道内屈指の稲作、付加価値の高いきゅうりの生産など、良品質な農産物の供給地帯であるが、農家戸数の減少と農業従事者の高齢化等による労働力不足は深刻な課題となっている。

令和元年12月末の人口は約7千人で、高齢化率は33.5%に上昇している。

（1）モデル事業実施の経緯

次世代を担う若者が、社会教育による学びを通じて地域の課題やその解決方法を様々な世代の住民と共に実践的に学ぶことは、持続可能な地域運営につながる。

こうしたことから、鷹栖町におけるモデル事業では、若者の声やニーズを若者自身が実際に具現化する取組を通じて、地域への愛着を育むことを目指す。

実施理由	新たな総合計画及び社会教育中期計画で「子どもから大人までのふるさと共育」に重点を置いているが、これまで高校生世代を対象とした社会教育的要素をもった取組は展開できていなかった。こうしたことから、高校生世代を対象として、地域への愛着を育み、結果的にまちづくりへの参画へ繋がる新規事業を確立させたいと考える。	
実施場所	鷹栖町内	
参加対象者	町内に在住の高校生、北海道鷹栖高校に通学する高校生5～10名程度	
事業後の参加者の活動に対する見通し	本事業から生まれた新たなコミュニティによる取組の展開	
連携予定の機関	北海道鷹栖高等学校	
講座予定回数	5～6回（うち講師派遣2回）	
取組イメージ	1年目	・新たなコミュニティの創出 ・高校生視点での新たな取組の企画立案
	2年目	・1年目に計画した取組の実施 ・高校生のアイデアや発想の具現化に向けた取組

（2）実施目的

- ・ 同じ世代のつながり、仲間意識を向上させ、ふるさと鷹栖への愛着心を高める。
- ・ 参加する高校生の主体性を尊重し、自分の未来、鷹栖の未来を考えるきっかけとする。

(3) 実施主体

鷹栖町教育委員会

(4) 実施概要

講座名 鷹栖町高校生プロジェクト

ア 第1回 (資料4-1)

実施日時	令和2年8月22日(土) 14時00分～16時00分
会場	鷹栖地区住民センター
参加者	旭川市内や鷹栖町内の高等学校に通う高校生5名(町内在住4名、町外在住1名)
講師	NPO法人 ezorock 代表理事 草野 竹史 氏
学習プログラム	○ 高校生プロジェクトの趣旨説明 ○ 活動の方向性についての共有

イ 第2回 (資料4-2)

実施日時	令和2年10月4日(日) 15時00分～17時00分
会場	鷹栖地区住民センター
参加者	旭川市内や鷹栖町内の高等学校に通う高校生5名(町内在住5名)
講師	NPO法人 ezorock 代表理事 草野 竹史 氏
学習プログラム	○ 地域課題の洗い出しと解決に向けた活動について ○ 鷹栖町の外から見たイメージ～鷹栖町出身大学生と塾長との対談 ○ 鷹栖町を活性化するための事業企画：オープンスペーステクノロジーの手法を用いて

ウ 第3回 (資料4-3)

実施日時	令和3年2月27日(日) 14時00分～15時30分
会場	北野地区住民センター
参加者	旭川市内や鷹栖町内の高等学校に通う高校生3名(町内在住3名)
講師	上川教育局社会教育指導班主査 小島 紀行 氏 社会教育主事 佐藤 麻友美 氏
学習プログラム	○ 鷹栖町内で新たに活動している町民・企業の紹介 ○ 企画会議のプロセスと手法

エ 第4回 (資料 4-4)

実施日時	令和3年3月13日(土) 14時00分～16時30分
会場	鷹栖地区住民センター
参加者	旭川市内や鷹栖町内の高等学校に通う高校生4名(町内在住4名)
講師	NPO法人 ezorock 代表理事 草野 竹史 氏
学習プログラム	○ これまでのふりかえり ○ 若手行政職員と協働して事業企画とプレゼンテーション

(5) モデル事業の視点

視点1 聞き取り調査等による地域の実情やニーズの把握

ア 活動の内容

【自分が知る地域のこと、地域に求めることを交流して地域の実情を紹介】

- ・より深くメンバー同士を知るため、「自分らしいエピソード」や「鷹栖に足りないものは？」などのテーマで、互いに紹介しあった。

【町外から見える鷹栖町のイメージを知る～ニーズに繋げる～】

- ・鷹栖町出身の札幌の大学生と塾長とのトークセッションを実施した。塾生にとって、大学生は自分の将来の姿を重ねられる存在であり、またこのプロジェクトが継続した時に塾生自らどう関わり続けられるのか、大学生の経験談を交えた「生の声」を聞く機会となった。



第2回報告書から抜粋

- ・旭川市内の高等学校へ通う鷹栖町在住の塾生が多い中、塾生や若手職員から旭川市の状況と比較しながら自分が知る地域よさや鷹栖町に必要なものを発表しあいながら、塾長が地域の様子をまとめた。
- ・昨年まで鷹栖町に住んでいた札幌の大学生から、地元から離れて気付いた「鷹栖町のよさ」「こんな鷹栖町になったらいいな」という思いを塾生に伝えることで新たな気づきがあった。

イ 活動を行う上での工夫等

- ・年度当初は、町内在住の移住者から鷹栖町の良さを聞き取る活動を予定したが、新型コロナウイルス感染症拡大により実施できなかった。そのため、塾生は旭川市内の高等学校に通う友人から聞いた鷹栖町の印象を発表し合い、町外から見える鷹栖町の魅力や課題について共有した。
- ・鷹栖町出身の札幌の大学生が地元から離れて気付いた鷹栖町のよさや課題を聞いて塾生に新たな気付きを与えた。

視点2 事業に関わる人との方向性の共有

ア 活動の内容

【自己紹介から関わる人のことを知る】

- ・塾長から、この事業の進め方やコンセプトの説明があり、関わる大人も含めての自己紹介を行った。
- ・高校生の参加理由はそれぞれで、中には「町長になりたい」との思いを持って参加した方もいるなど、個性あふれるメンバーが集った。



【創生塾を企画した鷹栖町教育委員会担当者の思いを共有】

- ・鷹栖町教育委員会 山本 裕太 氏から、この事業を立ち上げた経緯を説明した。

第1回報告書から抜粋

【小グループでの意見交換でやってみたいことを共有】 ※第2回以降も実施

- ・集まった感想やこれからどんなことができるだろうかなどについて、少人数グループで意見交換した。「このような事業に参加できて楽しい」や「高校生ならではの企画をしてみたい」、「鷹栖町のシンボルづくりはどうか」、「人を呼ぶイベントをやってみたい」などの意見が挙がった。



第1回報告書から抜粋

- ・毎回小グループを作り、塾生だけではなくその場にいる若手職員も話し合いに加わり鷹栖町への思いや事業の方向性を共有した。

イ 活動を行う上での工夫等

- ・同じ目的でこれから一緒に活動するため、最初の顔合わせの回では、参加者同士のことや事業の趣旨や流れを“知る”ことに重点を置き、アイスブレイクの要素を取り入れ、事務局の事業への思いを説明するなど相互理解できる機会を設けた。
- ・参加者の活動の方向性を合わせるため、対話や協働の場を毎回取り入れるなど多様な考えを共有した。

視点3 継続性のある取組とするための工夫

ア 活動の内容

【学習から行動へつなげるためのスキルアップする場を創出】

- ・上川教育局社会教育指導班の小島主査・佐藤社会教育主事の進行で、「企画会議のプロセス」や「企画の手法」を学んだ。その後、自分達の思いや事業のねらい、地域住民など事業に関わる人々のニーズ、地域資源の分析を塾生同士で意見を出し合い、ワークシートにまとめた。塾生がワークシートを記入しながら、塾生同士が議論した内容を下記のとおりまとめた。



第3回報告書から抜粋

【若手職員と協働して具体的な企画案を作成する場の設定】

- ・シンプルに企画やプレゼンテーションでできる「KP法※」を用いて、3つのテーマに沿ってグループワークを行った。グループワークでは、若手職員も加わって意見交流しながら企画案を作成した。作成した企画案はA4用紙10枚程度にまとめ上げ、全体で共有した。発表後には、聞き手全員から「Good」「More」の視点で付箋にコメントをもらった。



【事前事後アンケートを活用して参加の意欲を確認】

- ・事前アンケートには、塾生の不安や参加の意欲を記入し全体（運営者間）で塾生の状況把握を確認した。事後アンケートには、内容の理解度や次回への思いなどを塾生に記入してもらい、次回のプログラムの参考にした。

第4回報告書から抜粋

- ・第3回は、第2回で学んだプレゼンテーションの手法を用いて、個人のスキルアップにつながる機会を設けた。また、そのスキルを第4回で活かした。
- ・塾生だけではなく、若手職員と協働して企画案を作成し、互いに意見を出し合うことで新たな気づきがあった。
- ・アンケートを通して塾生の事業に対する姿勢を知ることによって、次回以降の関わり方や事業展開を柔軟的に変更した。

※「KP法」…紙芝居プレゼンテーション法。A4の紙とホワイトボード、マグネットがあれば、誰でも、どこでもすぐにできる超シンプルなプレゼンテーション&思考整理法。

出典：川嶋直著『KP法シンプルに伝える紙芝居プレゼンテーション』みくに出版 2013年

イ 活動を行う上での工夫等

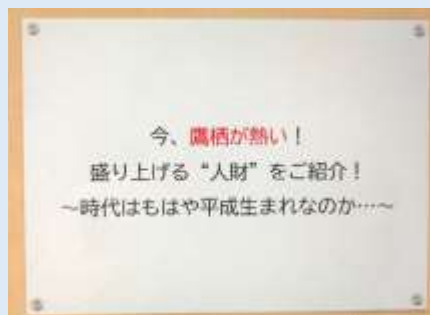
- ・議論した内容をホワイトボード上に図や言葉でまとめることで、当日（第3回）学んだことを振り返り時に理解したことや学びの成果を塾生は見取ることができた。次回（第4回）の活動に向けて、意欲を高める手立てとした。
- ・塾生の思いを具体的に表現するため、KP法を用いて若手職員とともに企画案を作り、プレゼンテーションする機会を設けた。プレゼンテーション後には、聞き手から前向きなコメントをもらい、プランの再考に生かした。

- ・事業後にアンケートを取り、参加者自ら事業の振り返りと次の活動に向けた意欲付けを行うこと通して、参加者が主体的に活動する環境づくりに努めた。

視点4 テーマ設定の工夫

【全体の場でのプレゼンテーションから小グループで検討】

- ・「何か企画を考えてみよう」をテーマに、塾長からメンバーの個性や役割を活かした企画立案の進め方を学んだ。そして、オープン・スペース・テクノロジー※の手法を用いて、塾生のうち3名が「野外フェス」「外国人との交流」「特産品のトマトジュースレシピコンテスト」という鷹栖町を活性化させるための企画を発表した。ほかの塾生やスタッフが3つ企画ごとのグループに分かれ、具現化に向けて、意見交換した。



第2回報告書から抜粋

ア 活動の内容

【町内で活躍する人材の紹介】

- ・教育委員会山本係長から、「よそ者」「若者」の視点から町内で新規事業を展開している方々を紹介し、現在鷹栖町では、創生塾生も含めて「若者」のチカラを求めていることを説明した。



第3・4回報告書から抜粋

- ・事業目的を意識した新規事業を企画立案する際に、オープン・スペース・テクノロジー※の手法を用いて事業テーマに迫る提案を行った。
- ・「同じ世代のつながり」「地域の担い手」の育成の視点から、現在鷹栖町内で起業している若手人材を紹介し、塾生に多様な人材との関わることもできることを説明した。
- ・テーマ設定について現在、「野外フェス」「外国人との交流」「特産品のトマトジュースレシピコンテスト」の3点が挙げられている。来年度早々に事業目的と照らし合わせながら、事業テーマを選定する。

※「オープン・スペース・テクノロジー」・・・テーマに関係する人々が一堂に集まり、主体的に課題を生み出し、複数箇所で同時に話し合いのセッションを開くことで、それぞれの課題に取り組む。参加者は本音で対話を行い、問題を共有し、解決に向けてアクションプランがスピーディーに生成される。

出典：ハリソン オーエン著『オープン・スペース・テクノロジー～5人から1000人が輪になって考えるファシリテーション～』 ヒューマンバリュー 2007年

イ 活動を行う上での工夫等

- ・参加者の思いを一つ一つ拾い上げてつなぎ合わせていく進め方を通して、楽しくやりがいを持てるように進めた。また、塾生だけではなく、町役場の若手職員も一緒に企画に参加することで、互いにアイデアを出し合うことで、テーマに具体性が見えた。
- ・町内で新たな取組を行っている地域住民の中で塾生の年齢に近い人材を紹介することにより、塾生の意欲を高めるとともに、塾生が企画する取組にその人材も「巻き込む」情報を提供している。

(6) 調査結果

ア 参加者

参加者の事業の実施前後の意識の変容を検証するため、質問紙調査を実施した。質問紙は、道立生涯学習推進センターの職員が作成した。

各項目は、4件法で実施し、教育効果を検証するため、調査時期である「事前」と「事後」の平均値を比較した。

調査時期と回答は、第1回事前 (n=5)、第1回事後 (n=5)、第2回事後 (n=5)、第4回事後 (n=4) の計4回である。

調査の結果は、図4-1のとおりである。

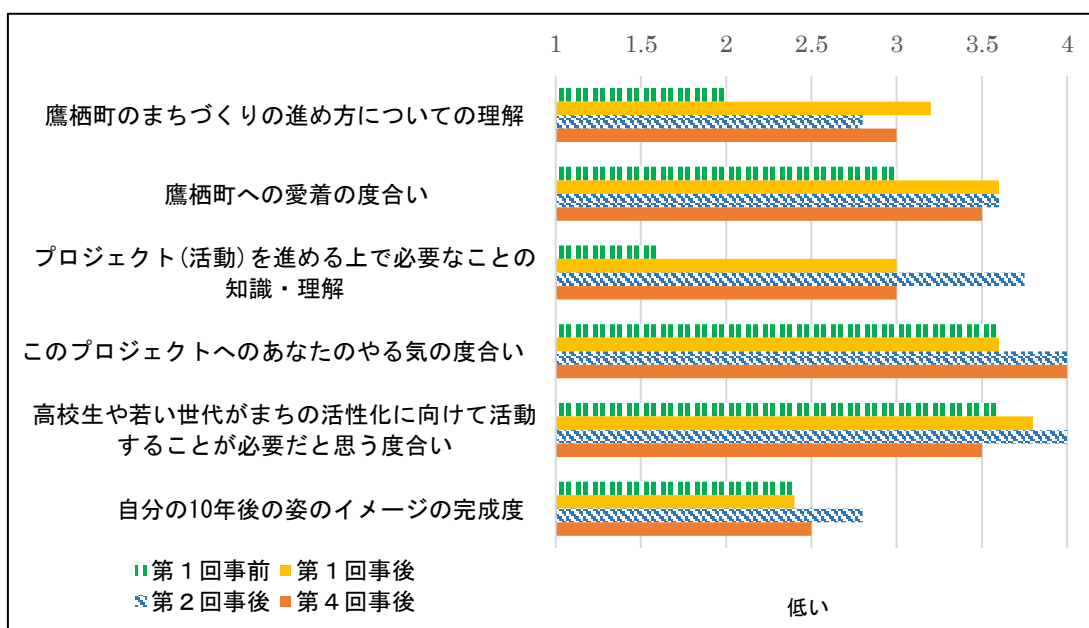


図4-1 参加者の事前と事後の意識変容調査結果 ※第3回は未実施

イ 事業担当者

事業終了後、事業担当者を対象に、記述式のアンケート調査を実施し、以下の回答を得た。質問項目は、次の3項目である。

- ①担当者の開始前の心境や開始前に準備したこと（塾生に向けての思いや塾生を募集する際の工夫など）
- ②創生塾を行っている時の担当者から塾生への対応（塾生にどのようなアプローチしたか?）
- ③担当者の事業終了後の心境や塾生の変化で気付いたこと

項目	①担当者の開始前の心境や開始前に準備したこと	②創生塾を行っている時の担当者から塾生への対応	③担当者の事業終了後の心境や塾生の変化で気付いたこと
第1回 令和2年 8月22日	高校生を対象とした事業実績がなく、参加者がどの程度来るかの不安はあった。 的確に周知するため、対象者本人へチラシを送付し、 <u>チラシのレイアウトも堅苦しくないよう配慮し、事業趣旨を明確に伝えた。</u>	高校生にとってこの事業が「負担」とならないよう、接し方に配慮した。 事業説明において、事業実施の背景と目的を明確に伝えた。 <u>伝え方も、行政らしさを感じさせない資料づくりとして配慮した。</u>	まずは、このような場を求めている高校生が“いた”ことが収穫であった。 <u>参加目的が多様で偏っておらず、今後の展開が楽しみになった。</u>
第2回 令和2年 10月4日	前回からやや時間が空いたので、振り返りの場を設けた。 <u>高校生の主体性を損なわないよう、その場の空気感を大切にするため、次までにこれをやらなければいけない等の負担を与えないようにした。</u>	行政側からの要望や押し付けは一切ないように配慮した。 グループディスカッション時には、 <u>高校生の意見や考えを尊重し、否定的な見解を見せないようにした。</u>	<u>担当者サイドが思っている以上に、ふるさとへの愛着、思いが高いと感じた。</u> 高校生から気付かされる部分も多く、行政職員として考えさせられることも。 <u>町で進めていく「ふるさと“共”育」を肌で感じた。</u>

<p>第3回 令和3年 2月27日</p>	<p>第2回から期間が空いての開催となったため、塾生の意欲が下がっていないかの不安はあった。 普段の生活で、高校生があまり知る機会がないであろう、<u>鷹栖町の“人”にスポットをあてて話題提供を行うこととした。</u>特に、塾生に年代が近い20歳代の話題をメインとした。</p>	<p>久しぶりに集まる機会であったため、<u>リラックスできる雰囲気づくり</u>を心掛けた。</p>	<p>企画の大枠ができたことで、塾生自身も何を考えたらよいか明確になり、グループワークも活発になったように見えた。 高校生は、<u>行政とは違う目線での考え方を持っていることをいかに取り入れられるか、行政側としても検討を進めなければならない。</u></p>
<p>第4回 令和3年 3月13日</p>	<p>年度内最後の開催となるため、どこをゴール地点にするべきか、<u>担当側で明確にできなかったが、講師とのすり合わせの中で方向性を固めることができた。</u> 具体的な内容を考えていく段階になると、<u>これまでの経験からどうしても場の雰囲気や参加者の考え方が固くなるため、その配慮を心掛けた。</u></p>	<p>和やかな雰囲気づくり。高校生自身の考えをうまく引き出しながら、グループワークを進めるよう配慮した。 どうすれば具現化できるか、<u>常に肯定的な方向に進むようなアプローチ</u>をした。</p>	<p>本事業においては、塾長のスキルなしでは動ききれなかったと感じている。塾長の力を最大限生かしながら、<u>町としてどう進めたいかをマッチさせ、次年度の展開につなげていきたい。</u> 少人数だからこそその良さもあるのでは。高校生もそれぞれの考えや思いをしっかりと出せて、メンバーの一員である自覚を持っているのではないか。 少しずつ形になってきたものを具現化できるよう、行政の横展開につなげていく。</p>

(7) 成果と課題

- 「鷹栖町のまちづくりの進め方についての理解」「プロジェクト(活動)を進める上で必要な知識・理解」が毎回塾生の学びの時間を設定したことにより、1ポイント以上と大きな上昇が見られたと考えられる。募集チラシの段階では、どんな活動するのか明確ではなかったため、どのようなプロジェクトなのかかわからず、1回目事前アンケートでは、「知識・理解」に関わる項目の数値が低かったと考えられる。
- 「高校生や若い世代がまちの活性化に向けて活動することが必要だと思う度合い」が1回目開始前より4回目事後より低い要因は、高校生や若い世代の活動による具体的な活動ができなかったことと考えられる。
- 事業当初から一貫して塾生である高校生の思いを具現化できるよう、丁寧に対応しながら多様な意見を引き出していた。
- 担当者自身も高校生を主体にした事業に初めて携わり、さらに事業プランが創生塾の活動を通して作りあげるといって進行するため、これまで行政の進め方と違う手法で事業立案することから不安を抱えながらスタートした。塾長の進行、塾生との関わりを通してその不安感が徐々に消えていることがわかる。
- 塾生とともにグループワークに参加し意見交流することを通して、塾生が若手職員から学ぶことができたとともに、若手職員も高校生である塾生から「まちへの思い」「高校生ならではの事業構想」で新たな気付きがあり、互いに刺激し合うこと機会になった。

「ほっかいどう学」地方創生塾（鷹栖町）

1年目 第1回

日時	令和2年8月22日（土） 14時～16時
会場	鷹栖地区住民センター
参加者	旭川市内や鷹栖町内の高等学校に通う高校生5名 （町内在住4名、町外在住1名）

内容

「鷹栖町高校生プロジェクト」の第1回は、申し込みしてくれた高校生5名（うち1名は欠席）と、当日飛び入りの1名を加えてのスタートとなりました。初めて会う人もいましたので、参加者同士のこと、この事業のことを“知る”ことに重点を置き、アイスブレイクの要素を取り入れて実施しました。

塾長の草野氏から、この事業の進め方やコンセプトを説明いただいた後、関わる大人も含めての自己紹介を行いました。高校生の参加理由はそれぞれで、中には「町長になりたい」との思いを持って参加した方もいるなど、個性あふれるメンバーが集いました。

その後、町教育委員会から、この事業を立ち上げた経緯を説明し、集まってみての感想やこれからどんなことができるだろうかなどについて、少人数グループで意見交換しました。「このような事業に参加できて楽しい」や「高校生ならではの企画をしてみたい」、「町のシンボルづくりはどうか」、「人を呼ぶイベントをやってみたい」など、大人顔負けの意見も飛び出し、有意義な初回となりました。



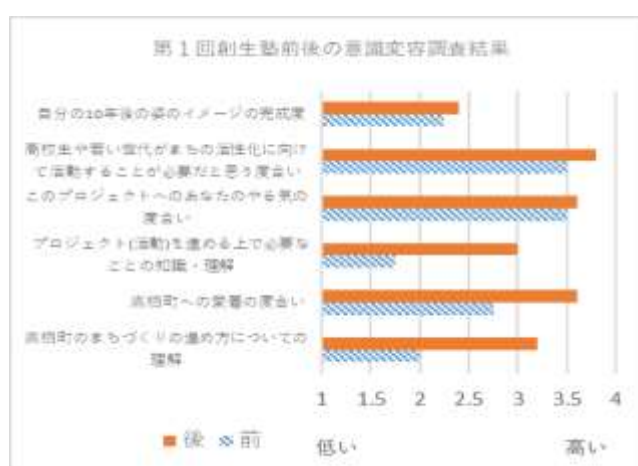
講師からの事業の説明



グループでの意見交換

アンケートの結果（事前・事後）

参加者の感想には、「この町ではどのようなことができ、どのようなことをすればよりよい町になっていくのかを常に考えて生活していきたい」や「鷹栖の良さを改めて知った気がしました。日々の生活から活性化について考えてみようと思うきっかけになりました」と前向きな回答があったことから、創生塾を通して「鷹栖町への愛着の度合い」や「鷹栖町のまちづくりの進め方についての理解」がさらに高まったと考えられます。



成果と課題

自ら手を挙げ参加してくれた高校生。理由は様々ですが、十分な可能性を秘めた方が多く、高校生ならではの本音トークにより、楽しみながら良い雰囲気の中で初回を終えることができました。少人数ならではの良さが生かされたように思います。

次回以降、少し具体的に話を進める中で、しっかりと高校生の主体性を生かしていけるよう、大人たちがサポートし、展開していけたらと考えています。

「ほっかいどう学」地方創生塾（鷹栖町）

1年目 第2回

日時

令和2年10月4日（日） 15時～17時

会場

鷹栖地区住民センター

参加者

旭川市内や鷹栖町内の高等学校に通う高校生5名
（町内在住5名）

内容

「鷹栖町高校生プロジェクト」の第2回は、より深くメンバー同士を知るため、「自分らしいエピソード」や「鷹栖に足りないものは？」などのテーマで、互いに紹介しあうことからスタートしました。

その後、鷹栖町出身の札幌の大学生と草野塾長とのトークセッションを実施。塾生にとって、大学生は自分の将来の姿を重ねられる存在であり、またこのプロジェクトが継続した時に塾生自らどう関わり続けられるのか、大学生の経験談を交えた「生の声」を聞く機会となりました。

後半は、「何か企画を考えてみよう」をテーマに、塾長からメンバーの個性・役割を活かした企画立案の進め方を学びました。そして、オープン・スペース・テクノロジーの手法を用いて、塾生のうち3名が、「野外フェス」「外国人との交流」「特産品のトマトジュースレシピコンテスト」という鷹栖町を活性化させるための企画をプレゼン。ほかの塾生やスタッフが3つ企画ごとのグループに分かれ、具現化に向けて、意見交換をしました。

次回はこれらの案の実現に向けて、より具体的な話し合いを進めていくことにしています。



トークセッションの様子

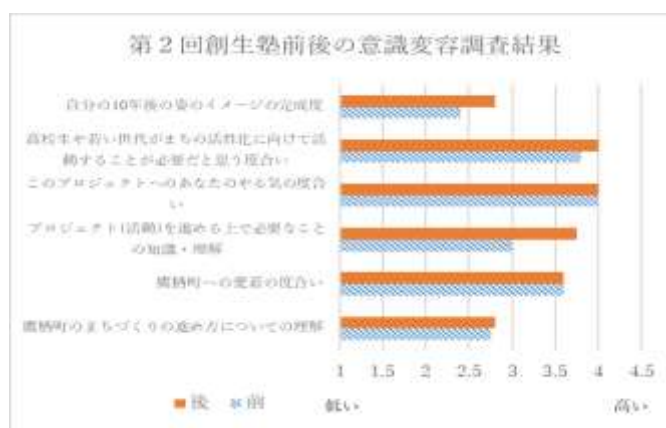


企画プレゼンタイム

アンケートの結果（事前・事後）

事前と事後のアンケートを比較すると、「プロジェクト（活動）を進める上で必要なことの知識・理解」の数値が0.75ポイント上昇した。

塾長と大学生とのトークセッションによるイメージの共有や、オープン・スペース・テクノロジーの手法を用いた企画に関する意見交換、わかりやすい資料があったため、塾生が今後の活動に見通しを持てたものと考えられる。



成果と課題

今回、鷹栖町出身の大学生1名がメンバーに加わりました。第1回開催の3日後に、草野塾長が代表を務めるNPO法人 ezorock の会議に参加したのが縁でした。このプロジェクトをきっかけに、つながりが広がったことも1つの成果だと思います。

企画プレゼンでは、高校生2名、大学生1名から企画案が出されました。高校生の主体性を失わず、これからいかに具現化させていくか、大人たちも真剣に向き合っていきたいと思います。

「ほっかいどう学」地方創生塾（鷹栖町） 1年目 第3回

日時
会場
参加者

令和3年2月27日（日） 14時～15時30分

北野地区住民センター

旭川市内や鷹栖町内の高等学校に通う高校生3名
（町内在住3名）

内容

「鷹栖町高校生プロジェクト」の第3回は、新型コロナウイルス感染拡大防止に向けた集中対策期間ため、久しぶりの開催となりました。上川教育局社会教育指導班の支援のもと、事業を企画・立案するための基本的な知識と技能を学ぶことや、地域で活動する人材を知ることなど、塾生のスキルアップを目指して実施しました。

前半は、教育委員会山本係長から、前回までの活動の振り返りと「高校生プロジェクト」に参考となる地域おこし協力隊員の活動や、移住者が新たな事業を生み出している事例を紹介しました。

後半は、上川教育局社会教育指導班の小島主査・佐藤社会教育主事の進行で、「企画会議のプロセス」や「企画の手法」を学びました。その後、自分達の思いや事業のねらい、地域住民など事業に関わる人々のニーズ、地域資源の分析を塾生同士で意見を出し合い、ワークシートにまとめました。

次回は、3月中旬に草野塾長を鷹栖町に迎えて開催する予定です。来年度の具体的な活動を見える化することで、塾生のアイデアの新たな創出と行動力やモチベーションを高めるきっかけにしたいと思います。



【グループワークの様子】



【活動の流れを見える化したイラスト図】

成果と課題

期間が空いたことで、高校生の事業に対する意欲面での心配もしていましたが、熱心に耳を傾ける姿やワークショップでの様子から、その心配は見事に吹き飛びました。

前半は、地域おこし協力隊を含めた地域の人財“20歳代”にスポットをあてて紹介。世代が近い人たちが様々な分野で、鷹栖町で活躍していることは、高校生にはあまり知られておらず、良い刺激になったのではないのでしょうか。

後半の学びでは、今後に向けたスキルアップのため、前回出されたアイデアをどう具現化するか、深く考えられた時間となりました。

「ほっかいどう学」地方創生塾（鷹栖町）

1年目 第4回

日時

令和3年3月13日（土） 14時～16時30分

会場

鷹栖地区住民センター

参加者

旭川市内や鷹栖町内の高等学校に通う高校生4名
（町内在住4名）

内容

「鷹栖町高校生プロジェクト」の第4回は、5か月ぶりに草野塾長を迎え、これまでの活動のふりかえりと来年度の活動する企画案の作成を行いました。

最初に、教育委員会山本係長から、「よそ者」「若者」の視点から町内で新規事業を展開している地域おこし協力隊員を紹介し、現在鷹栖町では、創生塾生も含めて「若者のチカラ」を求めていることを説明しました。

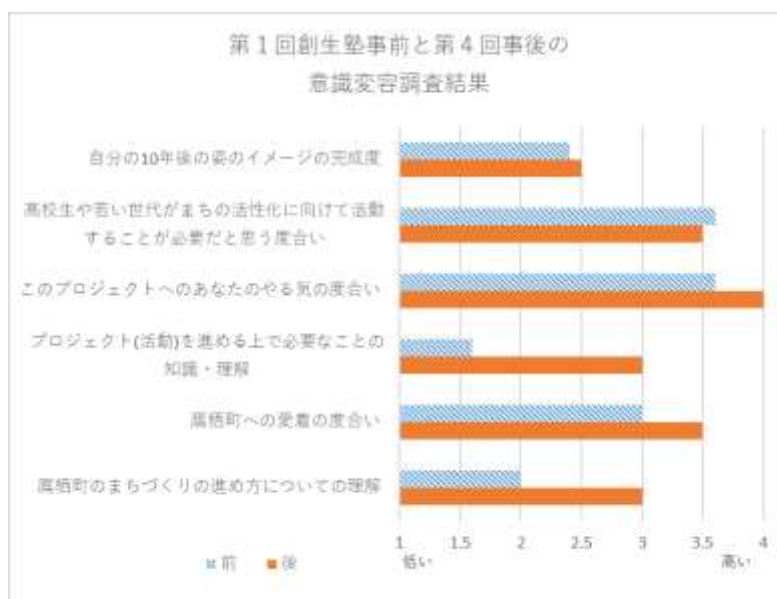
後半は、第2回に企画の提案があった3つのテーマ「外国人が帰りたくないと思うまちづくり」「オオカミの桃コンテスト」「パレットヒルズで野外フェス」について、企画を具体的に文字起こすグループワークとプレゼンテーションを行いました。塾長から、事業展開するために大切な手段の1つ、他地域で似たような事例を「まねる」ことや情報収集することなど「先行事例から学ぶ機会」をつくる必要があることが伝えられた後、シンプルに企画やプレゼンテーションできる「KP法」を用いて、3つのテーマに沿ってグループワークをしました。グループワークでは、町役場の若手職員も加わって意見交流しながら企画案を作成し、全体で共有しました。発表後には、聞き手全員から「Good」「More」の視点で付箋にコメントをもらって終了しました。



アンケートの結果（事前・事後）

「鷹栖町のまちづくりの進め方についての理解」「プロジェクト(活動)を進める上で必要なことの知識・理解」が1ポイント以上の上昇が見られたのは、毎回まちづくりに必要な手段を学ぶ機会が行われていたことからと考えられます。

反面、「高校生や若い世代がまちの活性化に向けて活動することが必要だと思う度合い」が若干下がっている要因を今後探っていきます。



2 芦別市（空知管内）

芦別市は、北海道の内陸部にある空知管内に位置し、市域面積は道内第5位の865.04km²、そのうち森林が約88%を占める、自然豊かなまちである。その美しい自然と澄み切った空、降るように美しい星がまたたく夜空といった自然環境を活かし、昭和59年12月1日に「星の降る里」を宣言している。

芦別市では明治時代後半には空知の他のまち同様、石炭の採掘が本格化し、最盛期には7万5千人を超える人口を抱え、大きく発展した。しかし、基幹産業であった石炭産業の崩壊をはじめ、各産業の低迷と合理化により就業者数が減少し、総人口に占める就業者の比率が低位な状況にある。

令和元年12月末の人口は約1万3千人で、高齢化率は46.5%に上昇している。

（1）モデル事業実施の経緯

学校教育と社会教育を通じて、若者が地域に幅広い繋がりを持ち、自ら問いを立ててその解決を目指す人材へと成長していく過程を支援することは非常に重要である。

こうしたことから、芦別市におけるモデル事業では、高校生にフォーカスを当て、高校生が地域の様々な課題を学び、解決に向けた取組を考えることを通じて、地域の担い手となることを目指す。

実施理由	芦別市の魅力を発見・発掘する取組を通して、地域の担い手を育てたい。	
実施場所	・北海道芦別高等学校 ・芦別市民会館	
参加対象者	芦別高等学校在校生 全生徒中10名程度	
事業後の参加者の活動に対する見通し	・北海道芦別高等学校が独自に行っている活動（農業まつり、キラキラフェスタへの独自出店等）を全市的に協働・協力できるような体制づくり ・Uターンに繋がる取組の展開 ・国内外観光客の誘致に繋がる取組の展開	
連携予定の機関	北海道芦別高等学校	
講座予定回数	5回（うち講師派遣2回）	
取組イメージ	1年目	・地域の良さを棚卸し ・高校生視点での新たな取組の企画立案
	2年目	・1年目に計画した取組の実施

（2）実施目的

高校生が地域と関わるができる場を設定することで、地元への思いを高めることができ、生まれた地域の活性化につながる活動を通じて、地域の担い手となる人材を育てる。

(3) 実施主体

芦別市教育委員会

(4) 実施概要

講座名 「ほっかいどう学」地方創生塾「探究活動グループ」

ア 第1回 (資料4-5)

実施日時	令和2年9月29日(火) 15時40分～17時00分
会場	北海道芦別高等学校
参加者	高校生6名
講師	あしべつ未来の森協同組合常務理事 新村 充 氏 Ka2 Design フリーデザイナー 大倉 加奈 氏
学習プログラム	○ 地方創生塾の趣旨説明 ○ 地域の実情から活動の方向性について共有

イ 第2回 (資料4-6)

実施日時	令和2年10月13日(火) 15時40分～17時40分
会場	北海道芦別高等学校
参加者	高校生6名
講師	あしべつ未来の森協同組合常務理事 新村 充 氏 Ka2 Design フリーデザイナー 大倉 加奈 氏
学習プログラム	○ 地域課題の洗い出しと解決に向けた活動について ○ 活動のイメージ化～高校生や地域住民が気軽に集まれる高校生カフェ～

ウ 第3回 (資料4-7)

実施日時	令和2年11月24日(火) 15時40分～18時00分
会場	北海道芦別高等学校
参加者	高校生5名
講師	あしべつ未来の森協同組合常務理事 新村 充 氏 Ka2 Design フリーデザイナー 大倉 加奈 氏
学習プログラム	○ 上砂川町の『まちの駅ふらっと』視察の振り返り ○ 具体的な活動内容の協議と来年度の取組について

(5) モデル事業実施の視点

視点1 聞き取り調査等による地域の実情やニーズの把握

ア 活動の内容

【塾生から見える地域の実情について意見交流】

- ・塾長から「地元の良いところといえば…」や「今、自分たちに何が必要か」、「自分たちが地域でできることは？」という問いかけをもとに意見交流を行った。塾生から「自分で食べてみた芦別名物」や「現在紹介されていないことを掘り下げた情報発信する」、「ガタタンではなく、無名なものを紹介したい」など多くの希望が挙げられた。



【活動の方向性について共有】

- ・食べ物話題から「高校生カフェ」はできないのかとの意見に話が集中して、カフェのイメージを共有した。

第1回報告書から抜粋

- ・「地元の良いところ」に視点を当て、思っていることを交流することで、塾生に「芦別市がこうなってほしい」という視点を持てる展開を目指した。「こういう商業施設や娯楽施設があればいい」などの意見が出てくる過程を通して、地域の実情を共有した上で、「高校生がこれから自分たちや地域のためにできること」という視点で地域のニーズを引き出した。

イ 活動を行う上での工夫等

- ・年度当初は、まち歩きなどの実地踏査や直接住民の声を聞いて、地域の実情やニーズ調査を行う予定であったが、新型コロナウイルス感染症拡大により実施できなかった。そのため、事業に関わるメンバーと塾長や塾生が持つ情報を共有する場面を多く設定した。
- ・地域の「負」の実情からではなく、今ある地域のよさに目を向けさせる問いを塾長から投げかけることで、塾生からは「芦別市にはおいしい果物やスイーツがたくさんあるから、それを市民が気軽に集まって食べられるところがあったらもっと顔見知りになれると思う」などの意見が挙げられた。

視点2 事業に関わる人との方向性の共有

【塾生から参加した理由の聞き取りから】

- ・上砂川町から通学しているので芦別のよいところを知りたい。
- ・自分が住んでいるところのよさを他の人にも知ってほしい。
- ・長く芦別に住んでいるが、知らないことが多いのもっと知るきっかけにしたい。

【創生塾を企画した芦別市教育委員会担当者の思いの発信から】

- ・高校生には、芦別はもとより近隣地域に住んでいても意外と知らないよいところを再発見したり、大人には見えない高校生の視線で改善すべきところを提案したりして、地元を好きになってもらいたい。
- ・将来地元を離れても、もう一度地元に戻る、離れていても地元を気にかけて地元愛を持った大人になって欲しい。



第1回報告書から抜粋

ア 活動の内容

【視察の振り返りから活動のイメージを共有】

- ・ホワイトボードに意見をまとめ、模造紙に書き出した。
- ・模造紙には、店名や店の雰囲気、具体的な希望設備、メニューを書き出し、来年度の活動に向けての土台作りとした。
- ・前回まで抽象的であった提供するメニューについては、上砂川町を視察したことと塾長からのアドバイスから自分たちで商品開発をすること、市内で販売している菓子をメニューに取り入れることなど、実現に向けてそれぞれの思いの共有を図った。



第3回報告書から抜粋

- ・「自分たちが住む芦別市のよさを伝えたい」「芦別市をもっとよくしたい」という思いは塾生だけではなく、担当者などの大人にもある。同じ空間と目線で一緒に自分の考えをまわりに伝え、聞き手も多様な意見を必ず聞き入れる姿勢で話し合う場を繰り返し設けた。

イ 活動を行う上での工夫等

- ・意欲的な塾生であるため、自分なりのイメージや考えを持っている。そのため、事業当初のオリエンテーションの場面で、多様な考えを全体で共有することで、お互いの考えを知り、理解し合う時間を設けた。
- ・塾生の多様な考えをある程度同じ方向に向くように、創生塾を企画した芦別市教育委員会担当者の思いを伝えることで、塾生が「自分たちは何を求められているのか」、事業の目的を各自考え、整理できるようにした。
- ・塾生が1つの意見から自分の考えを付け加えていく建設的な話し合う形になるよう、塾長や担当者、担当教諭など塾生と関わる大人たちが、塾生の意見を否定することなくすべて受け止めて、安心して話せる場をつくるなどの配慮をした。
- ・自分やまわりの考えを何度も確認するために、塾生から出た意見をホワイトボードや模造紙に書き出す見える化を図った。

視点3 継続性のある取組とするための工夫

【前回の宿題から新たな展望を導き出す振り返りの時間を設定】

- ・塾長から出された宿題「芦別に求めるもの」や『『高校生カフェ』に求めるもの』を塾生がどのように考えてきたかを確認し、カフェを開く上での具体的な取組について検討した。
- ・「現在自分たちでカフェをやるとしたら、どのようなカフェが理想なのか」を挙げた。
 - 落ち着いた雰囲気。子ども連れの人も入りやすく、子どもの遊び道具があり、くつろげるようなカフェ。
 - 外から中が見やすく入りやすいカフェ。場所も便利な所。
- ・「高校生など多くの世代が気軽に交流できる場所がいいのでは？」と、目的を導き出すことができた。



第2回報告書から抜粋

ア 活動の内容

- ・各回の終了前には、「振り返り」の時間を設けて、塾長から次回まで調べてほしいことや自分の考えを整理することなどの「宿題」の提案があり、その回答を次回開始時の「前回の振り返り」場面で全体交流した。

イ 活動を行う上での工夫等

- ・毎回、事後アンケート内に活動を振り返るための記入欄を設け、自らの学びや心境の変化を記入することを通して、次の活動への意欲付けや展望を示す機会を意図的に設けた。
- ・次の活動への意欲付けの一方策として、「自分の考えを整理、地域素材の気付き」ができる「宿題」が塾長から投げかけることがあった。

視点4 テーマ設定の工夫

【塾生それぞれのイメージから具体的なテーマを設定】

- ・具体的に場所とメニュー等について話し合い、「場所は駅の近く」「レジの横にお土産を置き、『ついで買い』を誘う」「土日ではなく平日に行ける場所」などの話が出た。
- ・塾生が実際にカフェに行った経験が乏しいことから、近隣にあるカフェを視察することになった。
- ・まちなかにあり世代交流ができる「カフェ」を運営している上砂川町の「まちの駅ふらっと」を視察することになった。



第2回報告書から抜粋

ア 活動の内容

- ・第2回で意見交流した結果、小さい子どもから高齢者まで幅広い年齢層の地域住民が「自分の居場所」「交流する場所」として集い、地域素材を使った食を提供する「高校生カフェ」を開くこととした。

イ 活動を行う上での工夫等

- ・テーマを設定するにあたり、主体となる塾生の意見を一つ一つ拾い上げ、塾長が丁寧にそれぞれの意見のよさを認めることで、塾生の発想が広がった。

- ・ 塾生の意見には、主体となる高校生が楽しくやりがいのあるテーマに設定しつつ、高校生の視点だけではなく地域全体で必要なこと（高校生を含めた居場所「たまり場」づくりや交流の場づくり、今あるものを活用した地域素材「地元店舗で製造されている商品の販売など」の提供）を挙げるなど、地域の活性化につながるテーマ設定を行った。

（6）調査結果

ア 参加者

参加者の事業の実施前後の意識の変容を検証するため、質問紙調査を実施した。質問紙は、道立生涯学習推進センターの職員が作成した。

各項目は、4件法で実施し、教育効果を検証するため、調査時期である「事前」と「事後」の平均値を比較した。

調査時期と回答は、第1回事前（n=6）、第1回事後（n=6）、第2回事後（n=6）、第3回事後（n=5）の計4回である。

調査の結果は、図4-2のとおりである。

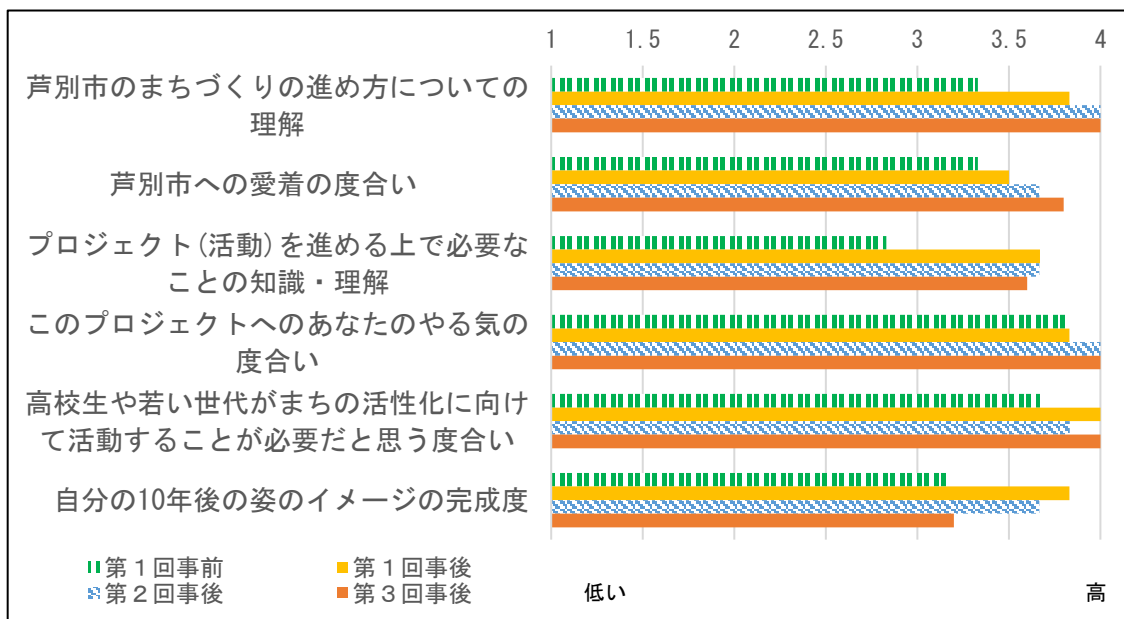


図4-2 参加者の事前と事後の意識変容調査結果

イ 事業担当者

事業終了後、事業担当者を対象に、記述式のアンケート調査を実施し、以下の回答を得た。
質問項目は、次の3項目である。

- ①担当者の開始前の心境や開始前に準備したこと（塾生に向けての思いや塾生を募集する際の工夫など）
- ②創生塾を行っている時の担当者から塾生への対応（塾生にどのようなアプローチしたか?）
- ③担当者の事業終了後の心境や塾生の変化で気付いたこと

項目	①担当者の開始前の心境や開始前に準備したこと	②創生塾を行っている時の担当者から塾生への対応	③担当者の事業終了後の心境や塾生の変化で気付いたこと
第1回 令和2年 9月29日	芦別高等学校の生徒に、地元はもとより近隣地域の <u>良いところを再発見したり大人には見えない改善すべきところを提案</u> してもらったりしながら、地元を好きになり、将来地元を離れてもまた戻ってくるなど地元愛を持つ人になって欲しいと思い企画した。	塾長と塾生による自由な意見交換を通じて、 <u>話し合いがしやすい環境を作る</u> よう心掛けた。	開始直後は塾生が大人しかったが、後半には雑談を含め楽しそうな雰囲気で話し合いがされ、塾生の意見やこの活動で行いたいこと、 <u>各自の得意なことなどをアピールできるようになっていたのが印象的</u> であった。
第2回 令和2年 10月13日	前回の話し合いで出た意見や希望をもとに、より具体的に塾生の発想を伸ばすべく、 <u>事前に講師と打ち合わせる場を設けて塾生への投げかける言葉や場の雰囲気</u> の作り方などを確認しながら準備を進めた。	1回目の創生塾で塾長と塾生が自由に話し合える雰囲気ができていたので、前回より <u>話しやすく自由な雰囲気</u> で意見交換するとともに、市の担当者としてのアドバイス(他機関の連携等)が必要な際はすぐに対応できるよう心掛けた。	回を追うごとに <u>塾長と塾生の距離が縮まり、気軽に意見交換できる環境</u> になってきていると思う。
第3回 令和2年 11月24日	今年度は新型コロナウイルス感染拡大のため、実際にイベントに参加したり、街頭インタビューを行ったり、地域住民と交流し意見を聴くことができなかった。来年度に向けて塾生の希望である「高校生カフェ」実現に向けて <u>塾生の率直な意見を引き出せるように視察する場を作</u> って、 <u>見通しが持てるよう</u> 準備した。	2回目終了後に、塾生を連れて上砂川町のまちな駅「ふらっと」へ行き、実際に地域住民の交流の場となっているカフェを見学することができた。運営している上砂川町企画課職員や地域おこし協力隊員から話を伺い、 <u>実現に向けて塾生が具体的なイメージ</u> できるようにした。	塾生からの提案で、理想のカフェを模造紙にまとめる作業をしたことで、塾長と塾生の間に「 <u>どのようなカフェ目指すか</u> 」を共有することができた。来年度に向けて、塾長と塾生の関係づくりと具体的な活動へ向けた土台を作ることができた。実際にカフェを開店させることは難しいと思うが、地域のイベントや道の駅等で、実際に期間限定カフェを運営するなど地域住民と交流する機会を設けられるよう諸々調整していくことを塾長と確認した。また、改めて塾長とのふりかえりを通して塾生である高校生が何を思い、何を必要としているのかをわかった。 3回目となる今回で、 <u>塾生も目標を実現するために、どのよう</u> に準備や進行していくのか、 <u>事を進めるための手立</u> てが分かってきたと思う。

(7) 成果と課題

- ・ 「芦別市のまちづくりの進め方についての理解」と「プロジェクト（活動）を進める上で必要なことの知識・理解」の項目では、塾長が詳しく説明したほか、塾長と一緒に検討し進めていることから、第1回創生塾開始前の調査した数値よりも第2回創生塾終了後の調査した数値が0.5ポイント以上上がったと考える。
- ・ 創生塾開始前からどの項目の数値も高い状況であり、第3回終了時点ではすべての項目の数値がより高くなっている。短期間に事業展開したことにより、塾生のモチベーションが下がらなかったことが要因と考えられる。
- ・ 「自分の10年後の姿のイメージの完成度」の項目において、第2回の数値が突出した要因として、この回で事業テーマが定まり、「高校生カフェ」を開くイメージが固まったことで、事業で活動する自分の姿がイメージできたものと考えられる。
- ・ 担当者については、事業当初から一貫して塾生である高校生の率直な意見を引き出すため、場の雰囲気や関わり方（話し方や聞き方など）には十分配慮して対応している。
- ・ 自由に話し合える環境が整い始めると、多くの意見が出始め、意見を積み重ねながら事業テーマの設定に至ったことがわかる。
- ・ 塾生が見通しを持って事業に参画できるよう事前事後に打合せを重ねることで、塾長や担当者の考えが整理できてきている。塾生だけではなく、それに関わる者の成長も見えてくる。

「ほっかいどう学」地方創生塾（芦別市）「探究活動グループ」 1年目 第1回

日時	令和2年9月29日（火） 15時40分～17時		
会場	北海道芦別高等学校		
参加者	高校生6名		
塾長	あしべつ未来の森協同組合常務理事 Ka2 Design フリーデザイナー	新村 充 氏	大倉 加奈 氏

内容

芦別市の地方創生塾は、芦別高等学校の1年生6名が参加した。芦別市と赤平市それぞれで活躍されている元地域おこし協力隊員の新村・大倉両氏を塾長とし、芦別のまちづくりについて考え行動する取組がスタートした。まず、塾生から創生塾に参加した理由を聞いた。

【参加した理由】

- ・上砂川町から通学しているので芦別のよいところを知りたい。
- ・自分が住んでいるところのよさを他の人にも知ってほしい。
- ・長く芦別に住んでいるが、知らないことが多いのもっと知るきっかけにしたい。

次に、今回創生塾を企画した芦別市教育委員会担当者から「塾生には、芦別はもとより近隣地域に住んでいても意外と知らないよいところを再発見したり、大人には見えない高校生の視線でしか見えない改善すべきところを提案したりして、地元を好きになってもらいたい。また、将来地元を離れても、もう一度地元に戻る、離れていても地元に気かけ地元愛を持った大人になって欲しい」という思いを参加者に伝えた。その後、参加者から「地元の良いところといえば…」や「今、自分たちに何が必要か」、「自分たちが地域でできることは？」ということについて交流を行った。塾生から「自分で食べてみた芦別名物」や「現在紹介されていないことを掘り下げた情報発信する」、「ガタンではなく、無名なものを紹介したい」など多くの希望がある中から「高校生カフェ」はできないのかとの意見に話が集中した。最後は、次回10月13日に向け、塾生が「芦別に求めるもの」「『高校生カフェ』に求めるもの」を考えてくるよう塾長から宿題が出され終了した。

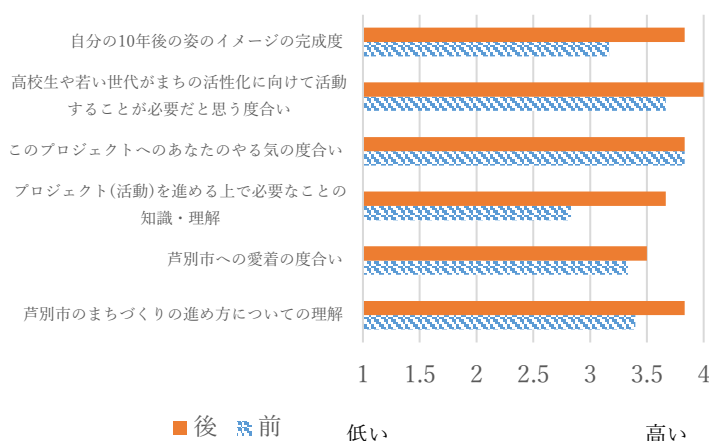


アンケートの結果（事前・事後）

参加者の事前に行った感想には、「うまくいくかどうか不安」「力になれるか不安です。貢献できるか不安」と言った声があがっていたが、自ら立候補して事業に参加したこともあって、事前事後とも「やる気の度合い」が非常に高かった。

今回は、塾長と塾生との意見交流を通して、高校生の思いを受け止めること、活動の方向性を共有することを大切にすることで、プロジェクトを進める上で必要なことの理解が高まったと考えられる。

第1回創生塾前後の意識変容調査結果



「ほっかいどう学」地方創生塾（芦別市）「探究活動グループ」 1年目 第2回

日時	令和2年10月13日（火） 15時40分～17時40分		
会場	北海道芦別高等学校		
参加者	高校生6名		
塾長	あしべつ未来の森協同組合常務理事 Ka2 Design フリーデザイナー	新村 充 氏	大倉 加奈 氏

内 容

第2回地方創生塾は、前回塾長から出された宿題「芦別に求めるもの」や『「高校生カフェ」に求めるもの』を塾生がどのように考えてきたかを確認し、カフェを開く上での具体的な取組について検討することにした。前段で「カフェ」に行ったことのある塾生が6人中2名で、その2名も大手コーヒーチェーン店のみであることがわかった。6人全員が市内の喫茶店には行ったことがない中、「現在自分たちでカフェをやるとしたら、どのようなカフェが理想なのか」を挙げてもらった。

【「どんなカフェにしたいか」など】

- ・人が入りやすいカフェ。雰囲気が良い。人が立ち寄りやすい。
- ・落ち着いた雰囲気。子ども連れの人も入りやすく、子どもの遊び道具があり、くつろげるようなカフェ。
- ・落ち着いてゆっくりできるカフェ。
- ・外から中が見やすく入りやすいカフェ。場所も便利な所。

以上の意見から、「高校生など多くの世代が気軽に交流できる場所がいいのでは？」と、塾生が感じていることが分かった。

次に、具体的に場所とメニュー等について話し合い、「場所は駅の近く」「レジの横にお土産を置き、『ついで買い』を誘う」「土日ではなく平日に行ける場所」などの話が出たが、前述したとおり塾生が実際にカフェに行った経験が乏しいことから、まずは近隣にあるカフェを視察することになった。

そこで、10月26日に塾生と塾長の大倉氏、市担当者が、まちなかにあり世代交流ができる「カフェ」を運営している上砂川町の「まちなか駅ふらっと」を見学し、具体的なイメージを共有することにした。



アンケートの結果（事前・事後）

事前には、「まわりの思いと気持ちが合わせられるかな？」「カフェをするのにどこに店を出したらいいかわかりません」との不安な声があったが、事後は「いろいろな案を出せた」「塾長の助言で自分たちがやるのがわかった」と充実感を感じた声があり、回を増すごとに塾生のやる気が高まっている。

2回目の開催ということで、塾長と塾生との距離も縮まり、意見交流しやすい雰囲気になってきた。高校生が自由な発想を発言でき、塾長と活動の方向性を共有できた機会になった。

第2回創生塾前後の意識変容調査結果



「ほっかいどう学」地方創生塾（芦別市）「探究活動グループ」 1年目 第3回

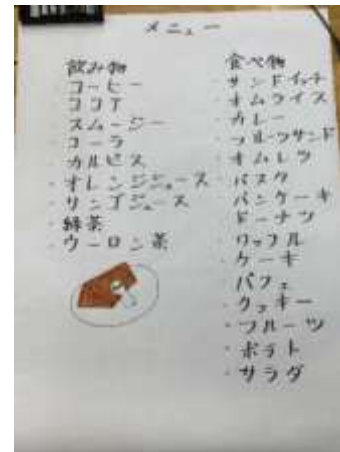
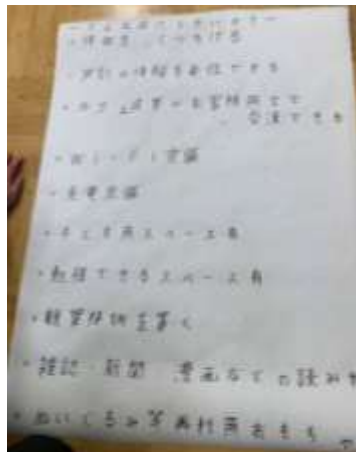
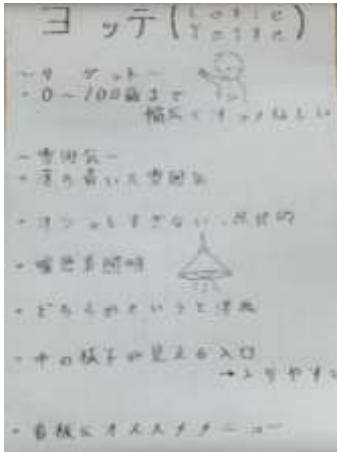
日時	令和2年11月24日（火） 15時40分～18時		
会場	北海道芦別高等学校		
参加者	高校生5名		
塾長	あしべつ未来の森協同組合常務理事 Ka2 Design フリーデザイナー	新村 充 氏	大倉 加奈 氏

内容

第3回目の芦別市の地方創生塾は、10月に見学した上砂川町の「まちの駅ふらっと」について、各自の感想・意見等を出し合った。模造紙に店の雰囲気、具体的な希望設備、メニューなどを書き出し、来年度実施する「高校生カフェ」のイメージを作った。

また、前回まで抽象的であった提供するメニューについては、上砂川町を視察したことと塾長からのアドバイスから自分たちで商品開発をするのはもちろん、すでに市内で販売している菓子をメニューに取り入れることなど、芦別らしいカフェの実現に向けてそれぞれの思いを共有した。

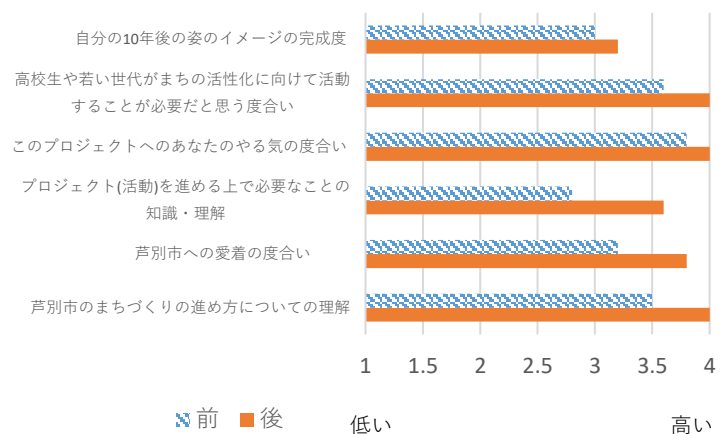
次年度は、今年度できなかった塾生自らが地域に足を運んで、地域の実情や住民のニーズの把握、地域イベントの参加を通して地域住民と関わる機会を作ることからスタートしたい。



アンケートの結果（事前・事後）

第1回の事前調査に比べ、最終回となる第3回事後調査結果は全項目とも数値が上昇している。特に、事後に記した感想に、「塾長が自分達の意見を受け入れてくれるので、発言しやすかった」や「マチについて考えたり、改善する点に気付きたりすることができた」、「みんなの意見がまとまってきたから、後は全力で参加したい」とあることから、自分達の意見をもとに具体的な活動が見えてきたこと、改めて地域のことを考えることで地域への愛着、取組みに対する意欲が高まったと考えられる。

第1回創生塾事前と第3回事後の意識変容調査結果



3 成果と課題

鷹栖町と芦別市が取り組んだモデル事業について、それぞれの特徴や成果と課題を次のとおりまとめた。

(1) 鷹栖町のモデル事業

モデル	地域単位／地域主導
対象者	・町内在住の高校生及び青年
塾長	・地元外、1人、若者の地域づくり活動を支援するNPO法人代表 ・多様な地域の事例について熟知しており、外の視点を取り入れた活動が展開しやすい。
特徴	・基本的に高校の関与がないので、活動の実施に当たっては自治体や地域団体等、地域の大人が強く関与することが不可欠となる。
成果	・異なる高校同士の交流、地域や地元企業と生徒個人の関わりが特に強くなる可能性が高い。
課題	・自治体側の企画・マネジメント能力が問われるほか、個別に参加者を集める必要があり、参加を希望する人がいなければ、活動の持続的推進は難しい。 ・参加生徒の通う高校が複数となるため、活動時間の調整や活動場所の確保も課題となる。
コロナ対応	・オンラインを中心に開催

(2) 芦別市のモデル事業

モデル	高校単位／地域主導
対象者	・市内の高校に通う生徒
塾長	・地元、2人（複数）、元地域おこし協力隊員 ・地域の現状や課題について熟知している上、地元の企業や団体とのつながりが深いため、地域に根差した活動が展開しやすい。 ・複数の視点から指導助言が可能。 ・高校生が地元就職したあとも継続して関わりを持つことができる。
特徴	・自治体（地域団体）が主導することで、地元の企業や団体との体制づくりが円滑化されるほか、地域の現状や課題が得られやすい。 ・高校の教育活動の一環として取り込まれるので、活動の方針や意志の決定が簡易であり、生徒にとっても活動場所や時間の確保が得られやすい。
成果	・生徒の成長を目の当たりにした自治体職員（地域団体）の意識の変化、地域と学校の連携・協働による地域人材の育成が期待される。
課題	・自治体側の企画・マネジメント能力が問われるほか、高校の参画がなければ、活動の持続的推進は難しい。 ・教育活動の一つとして認知・承認されなければ実施・継続が困難であり、学校の管理職や担当教諭の理解・協力体制が不可欠となる。
コロナ対応	・市や学校の方針に基づいて活動 ・市内の感染者が多い場合は、活動中止

